

## *Hard Times* Gradgrind の教育と功利主義

吉田 一穂

### SINOPSIS

The purpose of this paper is to show what the Gradgrind's principle of education in *Hard Times* (1854), 'Teach these boys and girls nothing but Facts' brings to the pupils of his school as well as to his children, and to make the meaning of the utilitarianism of the novel clear. Dickens reveals that utilitarianism based on self-interest exerts harmful influences on many people in Coketown. The unhappy fates of Tom and Louisa, and eventually Mr. Gradgrind's tragedy are Dickens's criticism of utilitarian philosophy based on self-interest. The world of fancy of Sissy Jupe as an altruist and that of the circus troupe, present a contrast to the world of facts; Dickens teaches us that fancy and 'a childhood of mind' are indispensable for happy human life by providing such a contrast. Sissy's behavior is based on her unconditional love and she gives relief to others by her insight into their mentalities. Dickens demonstrates that such a consideration for others as Sissy shows in *Hard Times* is required for what J. S. Mill proposes as "ideal utilitarianism."

### 1. Gradgrind の教育

チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-70) は、*Hard Times* (1854) において、学校における事実に基づく管理とそのいきつく先を示し、読者に教育が子供の心にかかる影響を及ぼすかというテーマを考えさせる。トマス・グラッドグラインド (Thomas Gradgrind) は学校経営者であるが、彼の学校は、空想よりは事実を、心よりは頭を優先する学校である。グラッドグラインドは作品の最初で、「事実だけが人生に必要なものじゃ。」<sup>1</sup>「仮にもあなたが理性的動物の精神を育て上げようとするならば、事実を以てするほかないのであり、その他の何も役立たぬにちがいない」と自身の見解を述べている。これが、グラッドグラインドが自身の子供を教育し、学校の子供達を教育する原理である。

ポール・デイヴィス (Paul Davis) は、グラッドグラインドを「経済学と功利主義の代弁者」<sup>2</sup> ととらえ、フィリップ・ホブスバウム (Philip Hobsbaum) は、グラッドグラインドの信奉する功利主義哲学を「ベンサム (Jeremy Bentham, 1748-1832) の立法行為に関する言明、すなわち行政は最大多数の最大幸福をめざすべきであるという言明に基づく哲学」<sup>3</sup> ととらえる。このような功利主義哲学は、作品において登場人物に悲劇をもたらすが、幸福をもたらすはずの功利主義がなぜ不幸をもたらすかを考える時、功利主義の持つ矛盾点をディケンズは描き出しているといえるのである。しかしながら、現在のところ、功利主義の持つ矛盾点について論述している批評家はいないように思われる。例をあげるならば、*Hard Times* のシシー・ジュープ (Sissy Jupe) やサーカス団の世界は、ベンサムやミル (John Stuart Mill, 1806-73) の功利主義論が否定する世界ではないのである。ディケンズは、作品の中でベンサムやミルの説く功利主義を批判しているのではない。現在までの批評家は、「功利主義」という言葉の意味を詳細に説明していなかったのである。そのため、ベンサムやミルの功利主義論と作品の中の功利主義を混同してしまう危険性があったのである。ここで功利主義について明確に説明しておく必要がある。功利主義とは、哲学で人間が幸福になることを、人生、または社会の最大目的とする考え方であるが、(1) 自分の幸福だけを主とする考え方、(2) 他人の幸福を主とする考え方、(3) 世間一般の全ての人々が幸福になることを主とする考え方とがある。倫理学では、この最後のものを指している、「最大多数の最大幸福」を原理とするベンサムやミルの倫理・政治学説に代表される。<sup>4</sup> 厳密に言うと、ディケンズが *Hard Times* で批判している功利主義は、(1) の自分の幸福だけを主とする考え方である。本論文では、功利主義という言葉に注意を払い、グラッドグラインドの教育とディケンズの批判した功利主義の相関関係について考えていきたい。

退職したもと金物の卸売り業者であったグラッドグラインドは、第1巻第2章の最初で、自身のことを「現実家」「事実と打算の人間」(3) と簡単に説明してしまう。グラッドグラインドは、「事実に支配されるべきであり、空想などしてはならない」という方針を持つが、このような方針を学校に浸透させると子供は生き生きとした子

供本来の姿をなくし、将来のため今を犠牲にする小心翼翼とした人間になるのは目に見えている。

第1巻第2章の授業風景において、ディケンズは、2人の生徒を対照的に描く。馬の定義について尋ねるグラッドグラインドにシシー・ジューブは、すっかり驚いてしまう。旅回りのサーカス団、スリアリー (Sleary) の曲馬団の一員であるシシーは、グラッドグラインドの言い方で彼女のなじみのある動物を語ることはできない。グラッドグラインドの問いに、この学校における理想的な答えをする生徒はビザー (Bitzer) である。<sup>5</sup> ビザーは馬を「四足獣、40本の歯、すなわち、24本は臼歯、40本は前歯、春に毛がぬけます。沼沢地方ではひずめもぬけま。ひずめは、堅くありますが、でも、蹄鉄を打たれる必要があります。年齢は口の中の班痕で分かります。」<sup>(5)</sup>と定義する。

ビザーの馬の定義は、人間の感情や感覚を完全に無視した定義<sup>6</sup>であるが、このような定義こそ「事実と打算の人間」グラッドグラインドの信奉する 'self-interest' に基づく功利主義にとって望ましい定義である。グラッドグラインドの教育は、個人的レベルにおいても徹底していて、グラッドグラインドの子供達は、月に顔のあることを想像することもなく、'Twinkle, twinkle, little star; how I wonder what you are!' (9)<sup>7</sup> という歌を覚えたこともなく、星のことを不思議だと思ったこともなかった。

ともかく、不思議は禁物であり、第1巻第1章 'Never Wonder' で説明されているように、コークタウン (Coketown) の町では幼い時から子供達を不思議がらせない方針が貫かれているのである。このような子供達であったが、ある日、グラッドグラインドは自身の子供ルイーザ (Louisa) とトム (Tom) がサーカスをのぞき見しているのを見て驚く。子供達は餓えきった想像力を満たすためサーカスを見にきたのだが、グラッドグラインドは子供の心理を理解できず、後に残念でならない自身の心情を友人のバウンダビー (Boulderby) に訴えるのである。ディケンズはグラッドグラインドとバウンダビーの友情を、感情の欠けた人間への精神関係に近づく限りの意味においての親友と説明する。バウンダビーに関しては、コークタウンの銀行家、商人、製造業者、その他いろいろなことを業としており、貧窮から身を起こしたことを自慢しているセルフメイドマンである。このバウンダビーは、想像をつまらぬものとする点において、グラッドグラインドと一致する。*Hard Times* においては、事実と空想の対立が重要な基調であり、グラッドグラインドとバウンダビーは事実に基づく世界を形成し、子供達の空想を締め出そうとする。しかし、注目に値する点は、ディケンズがグラッドグラインドとバウンダビーを比較し、グラッドグラインドは残酷な人間であったがバウンダビーのような粗野な人間でなく、それほど不親切でなかったと説明し、救いを与えていることだ。後にこの説明が重要な意味を持つことになる。

グラッドグラインドの方針は、彼に悲劇がふりかかるまで続く。グラッドグラインドの家に引き取られたシシー・ジューブは、第1巻第9章において、ルイーザに自身が M'Choakumchild<sup>8</sup> の質問に対し間違いばかりすることを言う。次の質問は、その間違いの典型を示す。

'Then Mr. M'Choakumchild said he would try me again. And he said, This schoolroom is an immense town, and in it there are a million of inhabitants, and only five-and-twenty are starved to death in the streets, in the course of a year. What is your remark on that proportion? And my remark was for I couldn't think of a better one that I thought it must be just as hard upon those who were starved, whether the others were a million, or a million million. And that was wrong, too.' (57)

この箇所は、第1巻第4章で現れるトマス・グラッドグラインドの息子 'Malthus' の名前からも推察されるように、ディケンズが英国の経済学者トマス・マルサス (Thomas Malthus) の書いた『人口論』 (*An Essay on the Principle of Population*) を意図する部分と考えられる。マルサスはこの書物の中で、私有財産制度を防衛し、貧困は貧民自身の責任であり、社会の責任でないとしたが、「飢え死にした人達はやっぱりつらかったに違いないと思います」というシシーの言葉は、ディケンズの『人口論』に対するアイロニーであるとともに、シシーの慈悲深い性質を表す言葉であると考えられる。自身は勉強ができないという意識を持つシシーは、問題に対して感情を優先させているが、グラッドグラインドの方針にとって、この感情優先こそ貧民への同情を喚起するものとして、不必要なものなのである。

*Hard Times* が出版された時、ある教育雑誌は 'Description of a Modern Trained and Certificated Schoolmaster' というタイトルで M'Choakumchild についての小記事を転載した。しかし、後になって投書家が、

もし M'Choakumchild が教えるのに適しているなら、彼が多くのことを知っていたとしても不都合ではないと抗議した。<sup>9</sup> 投書家が抗議するように、教師たるものは十分な知識を備えていることが必要であるが、教師が子供の心理を洞察できるかどうかが問題なのである。フィリップ・ホプスバウムは、ディケンズの書いたグラッドグラインドのやり方がバークベック (Birkbeck) の学校からきている」と指摘する。この学校の創設者は、功利主義者でジョン・スチュアート・ミルの友人であるウィリアム・エリス (William Ellis) である。彼の意図は、貧乏人が産業社会の機能となるよう準備させることであった。<sup>10</sup>

功利主義について注意すべき点は、功利主義が全体の幸福につながるか否かという問題である。ミルは 1861 年『フレイザーズ・マガジン』誌に『功利主義論』(Utilitarianism) を発表し、功利主義の擁護をした。ミルは『功利主義論』において、内部的制裁としての良心の声ということを強調している。ミルは、良心の有力な「自然感情」の基礎は、「人間の同胞としての感情」<sup>11</sup> であり、そのような感情を持ち全体の幸福につながるなら、功利主義は、望ましいと考えている。ミルは、「功利説は、人々が徳を望むことを否定しているだろうか。あるいはまた、徳は望ましいものでないかと主張しているだろうか。その正反対である。徳は、望ましいだけでなく、利害を離れて、それ自体のために望まれるべきものだ」と主張しているのである。<sup>12</sup> 「功利主義の基準は、一方で後天的欲求(金銭欲、権力欲、名誉欲)を社会全体の幸福を侵害しないかぎり容認しつつ、他方で、全体の幸福にとって何より大切なものとして、徳への愛好心をできるだけ強く育てあげてを命令し、要求するのである」<sup>13</sup> と述べている。

*Hard Times* の学校経営者グラッドグラインドと工場経営者バウンダビーの事実信奉の理由は、利己的動機に基づいているが、ミルの考えでは、動機が全体の幸福につながらず、利己的である限り、決して功利主義の困難は解決されないのである。<sup>14</sup> グラッドグラインドは、人間の同胞としての感情から引き起こされる良心の声を無視し、自分の幸福だけを主とする功利主義に陥っていたが、家庭を襲う悲劇により、改悛の必要に迫られるのである。

## 2. Coketown と功利主義

グラッドグラインドの家庭を襲う悲劇について考察する前に、コークタウンと功利主義について考察する必要がある。コークタウンにおいては、功利主義が雇用者側に浸透していて、町に住む人々に少なからず影響を与えるからである。コークタウンのモデルははっきりしない。マンチェスター (Manchester) と言う人もいれば、プレストン (Preston) と言う人もいる。プレストンの雇用者は長く組合に反対しているということでは知られていた。1842 年頃、賃金の増加がいたるところで認可されたが、プレストンでは認可されなかった。この年、4 人のストライキ参加者が軍隊に撃たれて死んだ。1853 年には、激しい労働運動の行われた年であって、運動により賃金が増加され、労働時間が短縮された。そして、6 月には 1842 年のストライキ以来、綿織物市場で最後の争いとなるものが始まった。動力織機の織工は雇用者に全ての織物に関する労働に関し、1847 年に行われた 10% の賃金削減を元に戻すよう求めた。ほとんどの雇用者は、労働者達の代表と会うのを断った。そして、労働者達の多くが解雇された。こういった人達や賃金要求を支援するため、組合が再編成され、いくつかの工場ではストライキが始まった。プレストンの雇用者の会は、9 月から労働者達をしめ出し、彼らが労働組合の一員であることを断念しないかぎり、彼らを再び雇わないと迫った。そして、ストライキをなくすため、組合のリーダー達に対する訴訟を始めた。<sup>15</sup>

*Hard Times* において、スラックブリッジ (Slackbridge) は労働組合の運動家であるが、彼は決して「想像」の産物ではなく、現実のモデルがいたことが指摘されている。ハンフリー・ハウス (Humphry House) は、*The Dickens World* でスラックブリッジが “Gruffshaw” を発展させた人物であることを指摘している。“Gruffshaw” は、ディケンズが “On Strike” で描写した代表者である。また “Gruffshaw” が現実のストライキのリーダーの一人 “Mortimer Grimshaw” を描いたものであることがわかっている。ディケンズは、プレストンを訪問した際、彼が会を呼びかけていたのを聞いた。<sup>16</sup> スラックブリッジは、*Hard Times* において、次のような演説をする。

‘Oh my friends, the down-trodden operatives of Coketown! Oh my friends and fellow-countrymen, the slaves of an iron-handed and a grinding despotism! Oh my friends and fellow-sufferers, and

fellow-workmen, and fellow-men! I tell you that the hour is come, when we must rally around one another as One united power, and crumble into dust the oppressors that too long have battered upon the plunder of our families, upon the sweat of our brows, upon the labour of our hands, upon the strength of our sinews, upon the God-created glorious rights of Humanity, and upon the holy and eternal privileges of Brotherhood! (138)

スラックブリッジは、労働者の代表者として演説を行うが、バウンダビーの工場の動力織機工のスティーブン・ブラックプール (Stephen Blackpool) は、組合参加を拒否したため仲間はずれにされ、あげくのはてに銀行泥棒の嫌疑もかけられてしまうのである。労働者階級であり、織工であるスティーブンは、自身の利益のため功利主義を乱用するバウンダビーにより、無慈悲な産業システムの犠牲者となるのである。

無慈悲な産業システムの犠牲者になるのは、大人だけではない。イギリスにおいて18世紀と19世紀の間には大きな変化があった。蒸気機関の発明の後、イギリスはすぐれた産業国家となった。工場が建てられ、人々は仕事を見つけられるよう工場の近くに移り住んだ。産業都市では、人口が急速に増えたが、多くの人々が貧困に苦しんでいた。新しく発展した産業は、石炭、鉄、綿、羊毛を生産したが、女性や子供を雇うのにあまり費用がかからないので、すぐに彼らは労働力の3分の2となった。

多くの労働者階級の人々にとって、この時代はたいへんな時代であった。大人も子供も1日の労働時間はしばしば15時間にも及んだ。子供は若い大人として扱われ、標準仕事量をこなすことを期待された。工場主達にとって子供は重要な労働力であったのである。<sup>17</sup> 1832年児童労働特別調査委員会が工場・炭鉱の惨めな少年達の実情を暴露した。この結果として1833年、工場法ができ、9歳以下の繊維産業の児童労働が禁止され、1日2時間以上就学することが決められた。ディケンズは、*Hard Times* 第2巻第1章で、「工場主達は、少年労働者を学校へ通わさなければならなくなった時に、一度破産した」(“They were ruined, when they were required to send labouring children to school”) (110) と工場法について言及している。工場主達にとって、少年労働者を失うことは痛手であったのである。当時の子供時代は、今日知られているような子供時代ではなかった。*Hard Times* の時代は、工場法以前の考え方が多分に残っていて、子供が意見や権利を持つことは十分に許されていなかったと考えられるのである。

ただ注意しなければならないことは、*Hard Times* の工場経営者バウンダビーも学校経営者グラッドグラインドも中産階級に属するがゆえに、トムムルイーザも中産階級に属し、労働者階級に属するスティーブン・ブラックプールやレイチェルとは、立場が異なることである。階級のことを考えると、グラッドグラインドは、労働者としてではなく、将来産業のリーダーないしはその妻として自身の子供達に事実による管理をさせるため空想を禁じたといえるのである。ルイーザにバウンダビーとの結婚をすすめるグラッドグラインドは、「お前の一生も総体的に生命を支配している法則によって支配されているということはわざわざ言う必要もあるまい」(100) と言うが、グラッドグラインドの言葉は、多分に階級を意識したものである。

労働者階級の人々は、初期的段階において、社会秩序を神の意志として受け入れていたが、次第に自分達が人間並に扱われていないことに気づき、ついに怒りを爆発させることになったのである。人々の怒りは、公の会議、行進、機械の破壊によって爆発したが、労働者階級は、最初メンバーを組織することが下手であるがゆえにさしせまった変革を行うことができなかつたのである。彼らが団結し状況を変化させるには長い時間が必要であったが、ついによきリーダーが現れ、初期の労働組合運動を組織したのである。<sup>18</sup> エリザベス・ギヤスケル (Elizabeth Gaskell, 1810-65) は *Mary Barton* の中でマンチェスターでのストライキを描写しているが、工場主達は低賃金で労働者達に仕事をさせることを自分達の当然の権利だと考えていたのである。

トムムルイーザもこのような労働者階級を統制する側に立つと想定し、グラッドグラインドは事実に基づく教育を行ったと考えられるのである。コークタウンでは、空想は、労働者への同情を喚起するものとして許されないのである。「人間の生存は生まれてから死ぬまで、その1インチ1インチが勘定台の上の取り引きであるべきだ。こういう方法で天国に行けないというのであったら、天国は金もうけの場所でない。天国など我々に用いないところだ。」(288-9) というグラッドグラインドの哲学は、明らかに神を冒瀆するものである。スティーブンの死は、このような功利主義へのディケンズの批判と考えられる。シルベール・モノ (Sylvere Monod) は、スティーブンの死を、「ディケンズが陶醉したすぐれたペーソスの独特の例」<sup>19</sup> と考えるが、この場面で章のタイトルである「星

光」が示すように星が重要な意味を持つ。星は、スティーブンの心の中を照らし、スティーブンは、その星が自身を救世主のところへ連れていってくれる星だと思ふのである。このようなスティーブンの最後は、空想に満ちており、スティーブンは星のことを不思議に思ったことのない子供達と対極に立つのである。

ディケンズは、スティーブンの死以外にグラッドグラインドの哲学と対立するものとして「スリアリーの哲学」を示した。スリアリーは、「人間というものは、どうにかして娯楽を求めずにはいられませんからねえ」、「人間は不断に働いていることもできず、不断に勉強していることもできません」(41)と言うが、スリアリーの哲学は、グラッドグラインドとバウンダビーの 'self-interest' に基づく功利主義にとっては邪魔になり、それゆえ排除すべきものである。注目すべきことは、スリアリーの哲学が、ベンサムが『道徳および立法の諸原理序説』(*An Introduction to the Principles of Morals and Legislation*) で述べている功利主義と対立する考え方ではないということである。『道徳および立法の諸原理序説』の基本は、[功利：utility]という観念であり、快楽を助長し、苦痛を防止する能力こそすべての道徳および立法の基本原則であるとする。この見地から快や苦は、その強度、持続性、確実性、範囲によって客観的に計量され、人生の目的は [最大多数の最大幸福：the greatest happiness of the greatest number] の実現にあるとされる。ベンサムは、この著書の中で、功利主義が禁欲主義を主張しているわけではなく、快楽という名のもとに全てを非難することは行き過ぎであると考えているのである。<sup>20</sup> グラッドグラインドは誤った功利主義の幻想に陥っていたが、家庭を襲う悲劇により自身の教育が誤りであったと悟るのである。

### 3. 家庭の悲劇

ゴム (A. H. Gomme) は「*Hard Times* は悲劇である。その悲劇の中心は、スティーブン・ブラックプールではなくグラッドグラインドである」と述べる。スティーブン・ブラックプールも悲劇的人物であるが、彼の場合、悲劇性は個人的レベルにとどまる。しかし、作品においてはグラッドグラインドの教育法が登場人物に大きな影響を与えていて、彼の教育こそが悲劇の原因となっている。

まず、悲劇は娘のルイーザに襲いかかる。彼女はジョサイア・バウンダビーと結婚するが、彼女の結婚は、彼女の意志が全く反映されていない。20歳のルイーザは、父親の強い勧めにより30歳も年上のバウンダビーと不釣り合いの結婚をする。グラッドグラインドは、娘の結婚に関しても事実を重視し、統計上の一般的基準を持ち出すのである。第1巻第15章の「父と娘」'Father and Daughter'でグラッドグラインドは、イングランドとウェールズの結婚の統計を参考にし、非常に年齢の異なっている者同士の結婚がかなり多いことから、問題はないとする。自分が街にうろついていた宿なしで、共同水道のところ以外では顔を洗ったことがない自分が、国会議員のトマス・グラッドグラインドの娘と結婚しようなどとは夢にも思わなかったと述べるバウンダビーの演説は、彼の結婚がルイーザへの愛情ではなく、社会的地位への執着心に基づいたものであることを示す。バウンダビーは、「わしがここまで来たことについては自分以外の誰のおかげも被っていないよ。」(15)と言い、自分の過去を作り変える。彼は母親に置き去りにされ祖母に育てられたが、意地悪な性のよくない老婆であったと過去をふりかえる。しかしながら、後に彼には教育を受けるため献身的に働いた母親ペグラー夫人がいたことがわかるのである。このようなバウンダビーをルイーザは嫌い、折りしもジェームズ・ハートハウスの誘惑にあい自分を見失いそうになるが、父親のもとへ逃れ帰る。「私の知っていることといえば、お父さんのお教えでは、とても私を救うことができないということだけです。」、「何か他の方法で私を救い出して下さい。」(219)というルイーザの言葉を聞き、グラッドグラインドは完全に打ちのめされてしまう。親を裏切ったという自己懲罰の感情に襲われているルイーザに必要なものは、親からの承認であり、不完全な自分であっても受け入れてくれる無条件の愛である。

ここに至るまで、ルイーザは感情のはけ口を弟に対する愛情に見出すが、父親の教育法の犠牲で利己的で卑劣な若者となった若者となったトムは、銀行泥棒となってルイーザを裏切るのである。グラッドグラインドの信念はぐらつき、「わしは頭脳というものが全能だと思っていたが、頭脳は全能でない場合もあるらしい。今朝わしはそれが全能だどうして力説できよう。」(223)と述べるが、グラッドグラインドの反省的態度が見られるのは第3巻第3章「断固たる決意」'Very Decided'においてである。そして、この章でグラッドグラインドとバウンダビーの決裂もまた明確になる。グラッドグラインドの教育に対する考え方が変化する一方、バウンダビーの考

え方はいぜんとして変わらず、両者は見解の相違をあらわにする。しかし、バウンダビーの論理は後にペグラー夫人が現れ真実を語るによりくつがえされる。ペグラー夫人は、バウンダビーが存在を隠していた彼の母親で、彼の語っていた生い立ちが全く嘘だったことがわかる。実際には、バウンダビーの母親は非道な虐待などせず、父親がバウンダビーの8歳の時死んでからずっと彼を教育し、年季奉公に出してやるのである。名門と結びつこうという卑しい欲求を持ち、自分を卑下することを自慢にしていることを看破された彼は、全く当惑する。

ただ1つ注意しなければならないのは、バウンダビーの強調するセルフメイドマンのイメージが雇用者に影響を与え、出世への動機づけを行う点である。ベンサムは、『道徳および立法の諸原理序説』の第10章第3節で、動機ということについて述べている。ベンサムは、名声への愛を社会的動機とし、金銭的関心や権力への愛は、自己中心的動機としている。これらの動機は、*Hard Times*において、産業の発展を促進する一方で、登場人物に不幸をもたらしているがゆえに、ベンサムの目指す「最大多数の最大幸福」を阻害していると言えるのである。グラッドグラインドのイギリスの産業社会を支えた功利主義哲学とバウンダビーの「下品で現実的な実利主義の態度」<sup>22</sup>とが合体し、産業社会の機能となる人物を生み出そうとするが、グラッドグラインドは自分の思惑と全く反対の結果を招いてしまう。息子のトムは、バウンダビーの銀行の金を盗み、銀行の職員ピツァーは、トムに不利な証言をする。第3巻第8章において、ピツァーはトムをバウンダビーに引き渡すため、コークタウンへ連れ戻そうとする理由を自身の出世のためだと言う。ピツァーは、他を蹴落とす競争原理を肯定し、次のようにグラッドグラインドに理論的説明をする。

‘I beg your pardon for interrupting you, Sir,’ returned Bitzer; ‘but I am sure you know that the whole social system is a question of self-interest. What you must always appeal to, is a person’s self-interest. It’s your only hold. We are so constituted. I was brought up in that catechism when I was very young, Sir, as you are aware.’ (288)

自身の行った教育のしっぺい返しを受けたグラッドグラインドは、まだ、望みを捨て切れず、ピツァーが学校にいたころ、彼のため骨を折ったと述べ、息子を見のがしてくれと頼む。ピツァーは、グラッドグラインドの申し出に対し、月謝を出していたという理由で断わる。エゴイズムに支えられた仮面の結末は崩壊し、グラッドグラインドは、自身の教育の失敗を目の当たりにする。彼の教育は、彼の信奉する功利主義哲学に基づくものであるが、この功利主義哲学は、結局自分の幸福だけを主とする考え方であり、自分の子供さえ教えることのできない考え方なのである。

グラッドグラインドの学校の運営は、当時の監督生制度 (monitorial system) に基づくものであった。この制度は、500対1という非常に経済的で能率的な教師対生徒の比率でやっていくことを可能にするものとして宣伝された。<sup>23</sup> まず教師が、彼ら自身生徒である監督生 (monitor) に教える。すると今度は、監督生が自分の組に戻って生徒達に今習ったことを伝えるのである。この方法を考案した人は、この方法を「精神界の蒸気機関」と誇らしげに呼んだ。ひとつの蒸気機関が多くの機械を動かす工場に似ているからであった。<sup>24</sup> ある枢密院特別委員会の報告があった後、この制度は教主制度 (pupil-teacher system) というものに発展していった。つまり、生徒はある一定期間、正式な見習いとして一人の教師につき、教授法の訓練を受ける。期間の終了時に、彼らは「師範学校」(“training college”) に入るための試験を受けることができる。この師範学校のカリキュラムを終了すれば、教師の免許状を取得するのに申し分のない条件がそろったことになる。<sup>25</sup> *Hard Times* の M’Choakumchild もこうした教育の産物であるが、師範学校の重視する事実暗記型のカリキュラムは、実際にはそれほど能率的ではなく、ディケンズは、「もし彼の暗記量がもう少しでも少なかったら、どれほど上手に多くのことを教えられたであろうか。」(8)とアイロニーをこめて批判している。グラッドグラインドの学校における教育は個人を無視しているが、グラッドグラインドは、自分の子供達にも個性を無視した教育を行うのである。エリクソンは、「心理・社会的モラトリアム」という言葉を使った。青年には、試行錯誤の期間が必要であり、多少常識から逸脱した行動がみられても、暖かく見守り、それに深い理解を示す人間の存在が、自己形成には欠くことのできない重要性を持つ。*Hard Times* のグラッドグラインドはモラトリアムを無視し、子供に期待をかけ、圧力をかけ、自身の価値観を押しつけたがゆえに自身の子供が成長してからしっぺい返しを受けるのである。

#### 4. サーカス団と精神の幼年時代

グラッドグラインドの子供が、事実一点張りの世界から逃避する場所を求めるとすれば、それは飢えた空想を満足させられるサーカス団しかない。第1巻第3章でルイーザとトムがサーカスのテントの穴から中をのぞき見ることが、それを裏付ける。ディケンズのサーカスに関する描写は、主に少年時代の娯楽についての思い出と19世紀初頭の文化、すなわち、人形劇、パントマイム、サーカス、縁日、健闘、Punch and Judyなど<sup>26</sup>との連想から生まれていると考えられる。*Hard Times*のシシー・ジューブは、スリアリーのサーカス団の道化の娘であるが、ディケンズのサーカス団の道化の記憶は、有名な19世紀の曲馬師アンドリュー・デウクロー(Andrew Ducrow)の弟、ジョン(John)の公演を見たことに基づいている。ジョンは、1820年代第一級のアストリー座の道化であった。彼は、1825年になって初めて道化になった。その時まで、彼はアクロバット、演技、馬術に取り組んでいた。<sup>27</sup> グラッドグラインドの子供達がテントの穴からのぞきこんでいたのは、「チロール流花の舞」であるが、この出し物に関係するのがルイーザ・ウルフオード(Louisa Woolford)である。このことから、グラッドグラインドの娘ルイーザの名前が皮肉な意味でここからとられたと推察される。肩を並べるもののない女性、綱渡り芸人であり女曲芸師ルイーザ・ウルフオードは、1828年4月7日アストリーズ・ロイヤル劇場で初舞台を踏んだ。出し物は‘The Flower Girl’、すなわち‘La Rosiere’であった。彼女は、1830年代サーカスの経歴における絶頂期にあった。ディケンズの *Sketches by Boz* の‘Astley’s’において、ルイーザは、優雅な演技で円形劇場を走り回っているものとして描写されている。そして、老いも若きもみな観客は、彼女の演技に喜んだのであった。<sup>28</sup> ソロの出し物をする他に、彼女は未来の夫であるアンドリュー・デウクローと組になって、‘The Tyrolean Shepherd and Swiss Milk Maid’、‘The Mountain Maid and Tyrolean Shepherd’、‘The Swiss Milk Maid and Tyrolean Shepherd’ など様々に名前を変えた2人組の曲馬を演じた。この出し物は、1853年アストリー座で演じられた。<sup>29</sup> アストリー座は、St. George Circus と Westminster Bridge Road が Lambeth Palace Road と交わるところにあった。メロドラマや曲芸で有名であった大衆娯楽場で *The Old Curiosity Shop* (1840-1)のキット(Kit)が最初に給料をもらって、母親と弟とバーバラ(Barbara)を連れて行った劇場である。フィリップ・アストリー(Philip Astley, 1742-1814)によって1774年に始められ、3度も火災に会いながら直ちに復興するほど人気のあった「アストリーズ・ロイヤル曲馬劇場(Astley’s Royal Equestrian Amphitheater)」は、1895年についてその幕を閉じた。<sup>30</sup>

さて、このようなサーカスであるが、*Hard Times*においては、サーカスはグラッドグラインドとパウンダビエの世界との対極にあるものとしての意味を持つ。ただ、グラッドグラインドが個人的レベルにおいて想像の世界の代表者とも言える<sup>31</sup>シシーを全くないがしろにしているわけでないことは、次の引用によりわかる。

He really liked Sissy too well to have a contempt for her; otherwise he held her calculating powers in such very slight estimation that he must have fallen upon that conclusion. Somehow or other, he had become possessed by an idea that there was something in this girl which could hardly be set forth in a tabular form. Her capacity of definition might be easily stated at a very low figure, her mathematical knowledge at nothing; yet he was not sure that if he had been required, for example, to tick her off into columns in a parliamentary return, he would have quite known how to divide her. (92)

事実シシーは、グラッドグラインドの想像の及ばない女性である。第2巻第12章の最初でディケンズは、グラッドグラインドを善きサマリア人を拙劣な経済家だと考えるような人物であると描写しているが、シシーは、善きサマリア人の持つ慈悲深い心を持っているのである。例えば、グラッドグラインドの信奉する功利主義の経済学に基づいた事実による結婚に失敗したルイーザが自己嫌悪に陥っていると、自己嫌悪が自己肯定になるよう傍らにいて導く。この点についてディケンズは、シシーの自発的意志を強調している。ルイーザの「お前は、お父さまのお言いつけで来たのでしょ」(225)という言葉に対し、シシーはあくまでも自分の意志で来たと言う。ただ、シシーの方にもルイーザの傍らにいたことがルイーザの気にいるか不安に思っている。自分がふだんからシシーを不安がらせるほど嫌っていたかどうか尋ねるルイーザにシシーは次のように答える。

‘I hope not, for I have always loved you, and have always wished that you should know it. But you changed to me a little, shortly before you left home. Not that I wondered at it. You knew so much, and I knew so little, and it was so natural in many ways, going as you were among other friends, that I had nothing to complain of, and was not at all hurt.’ (225)

ルイーザはシシーの言葉をやさしいかこつけ‘the loving pretence’ (225) と理解するが、シシーの言葉が彼女の性格からきていることは、その後のディケンズによる一貫した描写で明らかである。また、シシーは、ルイーザを誘惑しようとしたハートハウスに会ってルイーザに関する希望を捨てるように言う。この際もシシーは、頼まれてきたのかと尋ねるハートハウスに「私の愛と私に対するあの方の愛に動かされて参っただけでございます」(232) と自身の行為が自発的意志に基づくものであることを伝えている。さらに、シシーは、トムスの逃亡に関し、スリアリーのところへ行って自分が行くまでかくまってもらうように言う。トムスはサーカス団の団長スリアリーの努力で国外に逃げるが、第3巻第8章でスリアリーは、グラッドグラインドに、「人間というものとは何か楽しみがなくちゃならねえものです。始終勉強ばかりしたり、始終働いてばかりいられるものじゃありません。」(293) と言う。スリアリーの言葉は、グラッドグラインドの教育への批判である一方、人生には娯楽が必要であるというディケンズの見解でもある。ディケンズは *Bunderby Gradgrind* システムの価値と対照をなす価値を示すことにより、前者を批判するのである。またディケンズは、無条件の愛情の持ち主であるシシー・ジューブの教育的価値を示している。*Hard Times* において、シシーは頭脳の教育家ではないが、深い心理的洞察により他者を導いているので、人間教育家<sup>32</sup> といえるのである。

F. R. リーヴィス (Leavis) が指摘するように、<sup>33</sup> シシーが事実や教義を習得することができないことや教育に合わないことは、彼女の最高のそして無視することのできない人間性の一部として現れている。また、シシーが20番であるということを理解できなかったり、おとなしく従うことができないこと、あるいは、他の人間が算数の単位として存在するとは考えられないことは、彼女の美德である。シシーは他者のために生きることが自然であると考え、愛他主義を実践する。ミルは、『功利主義論』の中で、このような実践を功利主義にとって望ましいものであると教えている。なぜなら、ミルは「ナザレのイエスの黄金律の中に、我々は功利主義の完全な精神を読み取る。おのれの欲するところを人に施し、おのれのごとく隣人を愛せよというのは、功利主義の理想的極地である」<sup>34</sup> と述べ、愛他主義を功利主義にとって理想的な考えであるとしているからである。一方、‘self-interest’ に基づく功利主義の信奉者であるバウンダビーは、「誰かが自分に親しくするのは、その人間が自分を征服することを望んでいるからだ。」(240) と考えるのである。バウンダビーは、かつてグラッドグラインドに自分がコークタウンのジョサイア・バウンダビーであり、この町の家々、商売、煙突、煙はもちろん、労働者達も全て知っていると言う。そして自分に空想じみたことを言うものがあれば、その人間が何を言っているか言ってやると言う。バウンダビーによると、その人間が意味していることは、海亀のスープや鹿の肉を金のさじで食べたり、6頭立ての馬車を備えつけたりすることであり、グラッドグラインドの娘もそれを望んでいると言うが、バウンダビーは、イマジネーションが欠けているがゆえに、労働者達の気持ちも、ルイーザの気持ちも理解できないのである。ルイーザも自分の人生が統計や計算通りにいかないことを悟り、シシーの価値を知るのである。そして、グラッドグラインドは、空想や精神の幼年時代が欠けていたがゆえに、ルイーザが反動としてそういったものを無意識に求めていたと知るのである。

ディケンズは、トムとルイーザの不幸な運命をもたらしたものは、グラッドグラインドの‘self-interest’ に基づく功利主義であることを我々に示した。ディケンズは、動機が利己的である限り、決して功利主義の困難は解決されないことを作品の中で示している。ディケンズは、全体の幸福ということを考えるならば、他者を不当に扱ったり害を与えたりしないだけでなく、*Hard Times* のシシー・ジューブのような心理的洞察と積極的な意味での他者への思いやりの表明・実行が必要だと考えていたのである。そして、グラッドグラインドの改心を示すことにより、我々に空想や精神の幼年時代の大切さを教えたのである。

- 1 Charles Dickens, *Hard Times* (New York: Oxford University Press, 1991), p.1.以下、引用文は、同書により引用末尾の( )にページを示す。
- 2 Paul Davis, *Dickens Companion* (Harmondsworth: Penguin Books, 1999), p.184.
- 3 Philip Hobsbaum, *A Reader's Guide to Charles Dickens* (London: Thames and Hudson Ltd., 1972), p.175.
- 4 日本大辞典刊行会(編)『日本国語大辞典第4巻』(小学館、1982), p.623.
- 5 Joseph Gold は、Bitzer の名前について「Bitzer の名前は、彼の構成要素である知識の断片を暗示する」と述べる。[Joseph Gold, *Charles Dickens: Radical Moralists* (The Copp Clerk Publishing Company, 1972), p.203-4.]
- 6 Bitzer の馬の定義は、Charles Knight の *Store of Knowledge* のような出版物に見つけられるようなものによっていると考えられる。[David Craig, Introduction to *Hard Times* (Harmondsworth: Penguin Books, 1969), p.22. John Holloway, 'Hard Times,' in *Dickens and the Twentieth Century Reader* (1962), pp.159-62. を参照]
- 7 これは、*Rhymes for the Nursery* (1806)の中での Jane Taylor の詩 'The Star' からきている。第1スタンザは、次に示す通りである。  
Twinkle, twinkle, little star!  
How I wonder what you are  
Up above the word so high,  
Like a diamond in the sky
- 8 Norman Page は、M'Choakumchild の名前について、*A Descriptive and Statistical Account of London* (1834年創設)の初期の会員である J. R. McCulloch の名前を思い起こさせる意図があるかもしれないと指摘する。[Norman Page, *A Dickens Companion* (New York: Schocken Books, 1984), p.192.]
- 9 Philip Collins, "Good Intentions and Bad Results," From *Dickens and Education* (London: Macmillan & Co. Ltd., St.Martin's Press, Inc.; Toronto: The Macmillan Co. of Canada, Ltd., 1961), pp.148-55: rpt., in *Twenty Century Interpretation of "Hard Times"*, ed. Paul Edward Gray (Englewood Cliffs Prentice-Hall Inc., 1969), pp.30-1.
- 10 Philip Hobsbaum, *op.cit.*, pp.176-7.
- 11 『ベンサム、J. S. ミル』(中央公論、1997)の中の「ミルの思想体系」は、ミルの思想を解りやすく説明している。
- 12 John Stuart Mill, *On Liberty and Utilitarianism* (New York: Bantam Books, 1993), p.178.
- 13 *Ibid.*, p.181.
- 14 拙稿、「ジョン・スチュアート・ミルの『功利主義論』と全体の幸福」、『高野山時報』No.2836. (p.86.)
- 15 David Craig, Introduction to *Hard Times* (Harmondsworth: Penguin Books, 1969), pp.30-1.
- 16 K. J. Fielding, "The Battle for Preston," From *Dickensian*, Part 4, No.312. (September, 1954), pp.159-62. rpt. in *Twenty Century Interpretations of "Hard Times,"* (p.19.)
- 17 Kate Merriweather, *Spotlight on Social Class in Britain* (Eastbourn: Cassell Ltd., 1984), pp.8-10.
- 18 *Ibid.*, p.12.
- 19 Sylvere Monod, "Dickens as Social Novelist," From *Dickens the Novelist* (University of Oklahoma Press, 1968), pp.444-52.: rpt. in *Twenty Century Interpretations of "Hard Times,"* (p.84). Monod は、Stephen の誤った言葉使いが、彼の無教養の表れであり、それゆえに、読者は心動かされてしまうと指摘する。また、Monod は、誤った言葉づかいに Stephen の純粋な心の明確な証拠を見てとれると指摘する。
- 20 Jeremy Bentham, *An Introduction to the Principle of Morals and Legislation* (Oxford: The Clarendon Press, 1823), pp.12-3.
- 21 A. H. Gomme, *Dickens* (London: Evans Brothers Limited, 1971), p.134.
- 22 A. O. J. Cockshut, *The Imagination of Charles Dickens* (London: Collins, 1961), p.138.
- 23 Daniel Pool, *What Jane Austen Ate and Charles Dickens Knew* (New York: A Touchstone Books, 1993), p.126.
- 24 宮崎孝一、『ディケンズ』(英潮社、1977), p.58.
- 25 Daniel Pool, *op.cit.*, p.126.
- 26 Peter Ackroyd, *Dickens* (London: Minerva, 1990), p.725.
- 27 Margaret Simpson, *The Companion to "Hard Times"* (Mountfield: Helm Information Ltd., 1977), pp.61-2.
- 28 Charles Dickens, *Sketches by Boz* (Harmondsworth: Penguin Books, 1995), p.133.
- 29 Margaret Simpson, *op.cit.*, p.60.
- 30 中西敏一、『チャールズ・ディケンズの英国』(開文社、1971), pp.26-7.
- 31 John R. Reed, *Dickens and Thackeray: Punishment and Forgiveness* (Ohio University Press, 1925), p.231.
- 32 「人間教育家」とは、ここでは、深い心理的洞察により他者を導くだけでなく、道徳的観点、また他者の幸福に寄与するという観点から、自身が他者の模範となる人物のことを意味している。
- 33 F. R. Leavis, "*Hard Times: The World of Bentham*," in *Dickens the Novelist* (Harmondsworth: Penguin Books, 1970), p.255.

John Stuart Mill, *op.cit.*, p.156.

出典：『甲南英文学』第17号(甲南英文学会、2002年7月)43-59.